

太宰治―カインコンプレックス

太宰治再考

高 橋 喜 郎

序

ある時期、私は精神医学や病跡学に関する本ばかりを読んでいた。それらの書物の中には、太宰治が常連と思われる程度々登場していた。確かに、太宰の数度の自殺及び心中未遂と玉川上水における心中を思うと、彼は一見尋常な人間でないかのような印象を与える。

しかし、誰の考察を読んでも、首尾一貫した太宰像を描き出しているものは、なかった。狂人の行動には首尾一貫性がないと言い切ってしまう、そこからは何も始まらない。仮に太宰が本当の狂人であったとしても、ある視点から見た場合、その人生は、首尾一貫しているはずである。

この小論は、太宰狂人説を否定すると同時に、太宰の異常行動に内在する首尾一貫性を、書簡と作品と証言などから明らかにしようと試みたものである。

一、井伏鱒二宛の書簡

昭和十一年九月十五日付けの井伏鱒二宛書簡の末尾に、太宰はこう書いている。

（自分でいふのをかしく、けれども、「私、ちいさい頃から、できすぎた子でした。一切の不幸はそこから。」
どんなに怠けても、^{オッ}乙とつたことなくいつも首席の罪。

私の「作品」又は「行動」わざと恥しいバ力なことを擇んでして来ました。小説でも書かなければ仕様がな
地へ押しこめる爲に。無意識なし。（一）

ある意味で、自己韜晦の天才である太宰が、こんな告白をしているのは不思議である。ここからは、太宰の井伏
に対する全幅の信頼と太宰のパビナル中毒による高揚感が感じられる。

ここに書かれた太宰の告白が、俄には信じ難いと思う読者もいるはずだから、裏付けになる証言ないし事実を引
く必要がある。

こついつの場合、一番説得力のあるのは、肉親の発言であろう。太宰治（津島修治）の長兄津島文治は、次のよう
に語っている。

「存知のよつに、修治とても最初から不良だったというわけではありません。正直、わたしら五人の兄弟の中
で、学業が一番できました。ですから親にしてみれば憎かるうはずがなく、特に父（源右衛門）は修治、修治とい
つて可愛がつておりました。小学校は無欠席、優等を通し、青森中学でも良い成績を残して弘前高等学校へ進んだ
のですが、弘高で不良性が芽生え、左翼運動に走ったり、「桃色」に狂つたりしたのです。（二）

恐らく、これだけでは、太宰の書簡の内容の真実性を裏付けるのに不十分であらう。

「太宰治研究」の年譜には、次のような記述がある。

(昭和二年)二月七日、県立青森中学校第四学年を、在籍百六十二名、及第百四十八名中等第四席の成績で修了。(三)

この成績は、特に目を見張るほどのものでもないが、確かに、クラス単位で考えれば、太宰の書いている通り、太宰が首席であつたというのは、事実であらう。

むしろ、驚嘆すべき事実は、前出の長兄文治の回顧談の中に有る。

つい先年、リュックサックに入つた彼(太宰)の中学時代の教科書が荷物の中からドサツと出てきたのです。それは、……どのページを聞いてもイタズラがきだらけなんです。ペンで先生の顔やら、兄弟の顔らしき似顔絵やらが、各ページにぎっしり描かれているのです——あれでは、先生の講義も満足に聞いていなかったでしょう。(四)

太宰は、青森中学時代、『塵氣樓』という同人雑誌を発行し、リーダーとして八面六臂の活躍をしていたことが、その雑誌の後記や合評記^(五)から伺い知れる。

これらのことから、太宰がいかに卓越した頭脳の持ち主だったかが分かると同時に、井伏宛書簡の前半部が事実
に即しているということも立証される。

二、初期の習作及び作品における太宰と長兄文治

初期の習作の中で、作品としての価値は別として、太宰の人生を考える場合、最も重要と思えるものは、多分

『角力』である。

兄と角力を取った弟が、いともたやすく兄に勝ってしまい、強い兄を望む気持ちから、二度目は、兄にわざと負けるという話である。

ア、僕の兄に自分が負けたら……誠二は自分より強い兄を要求する心から兄より弱い自分を要求する心に變つて行つたのは無理もないことである。

誠二はこの弱い兄を自分より強くするのは到底不可能だと思つた。併し自分は兄より弱くなるのはあながち不可能な事ではないと思はれた。(六)

部分的には、太宰が処女作と呼んだ『思ひ出』の初稿とすら見られなくもない『無間奈落』の中に、こう書かれている。

實際五人もの男兄弟のうちでたつた一人の優等生である乾治は、彼の家の人達に御自慢の種とされるのは尤もな事であつた。併し乾治は家の人達の喜ぶのは彼自身が優等生であるからでは無くつて、大村家に彼といふ優等生が一人出来た爲であるといふこと位は勿論早くから承知はして居たが、彼は家の人達の喜ぶのは見ては、つい先頃迄は萬更悪い氣もして居なかつたのだ。それが此頃になつて、……彼の家の人達のこの態度は彼の將來に恐るべき障害を來すものでは無からうかと不安を感じて來たのであつた。(七)

太宰は、よく言われているようなオズカス（叔父のカス）ではなかつた。津島家の戸主は、太宰の曾祖父と父と二代続けて養子であつた。(八) 見方を変えると、津島家は、有能な人材を養子に迎えることで、大きくなって來た家なのである。建前として長子相続はあつたかも知れないが、津島家の伝統からすれば、最適者相続だつたであらう。

太宰の父が長生きしていれば、太宰を家督相続人に指定したかも知れない。太宰の父が急逝した時、実質的に家の実権を握っていた祖母も、その点では、太宰の父と同じ考えで、いずれは太宰を後継者にと思っていたのかも知れない。

『彼等と其のいとしき母』に、太宰はこう書いている。

『お前はかりが、はあ、頼みだぞ』

母はよく龍二の耳にそつとこつ囁くやうに成つて居た。成程——龍二は、故郷の村から少し離れたM市の中學を優等で出たし、そして又同じ市まちの高等學校にも惡からぬ成績で入學出來た。だからこれは行く行く父の如き立派な官吏に仕上げて、家督を相續させねばならぬと、母は獨りで力んで居た。龍二も亦漫然と其の積りで居るのだつた。(九)

確かに、この小説は、中産階級の家庭の物語になっているが、恐らく、津島家の実力者である祖母と太宰の間にこれと似た状況がなかったとは言えまい。『無間奈落』に、彼の家の人達のこの態度は彼の將來に恐るべき障害を來すものでは無からうかと不安を感じて來たのであつた。とあるように、長兄と祖母と母との間にあつて、太宰は深く苦悩したに違いない。

長兄を追い出して、自分が家督を相續するという道もあつたかも知れないが、太宰は自分を無資格者にすることによつて、長兄に負ける道を選んだ。それが、学業を怠ることであり、それが、芸者遊びに走つたり、左翼運動に加わることであつた。これらの行動は、半ば太宰自身の意志に反して取つた行動であり、自分を不良の無資格者にすること、太宰としては、長兄との対決を回避しようとしたのである。しかし、長兄には、太宰の遠謀深慮が見

抜けなかった。長兄は、太宰に芸者の小山初代との結婚を許すと同時に、太宰を分家除籍にした。

太宰は、長兄から義絶されるのは一年前、『地主一代』に、こう書いている。

現に私の弟までも、私が黙つてゐるのをいゝ事にして此の爭議の後押しをしてゐるらしいのだ。どつせ私の家を横領しやつとのコンタンなんだろう。ちゃんと知つてゐる。馬鹿！今に吠え面うづかくな。こつちから追ひ出してやる。(+)

しかし、太宰は本当に家から追い出されると思つてはいなかっただろう。恐らく、分家除籍の処分を受けた時の太宰の心中を最も雄弁に語っているのは、相馬正一氏の文章である。

長兄に対しては生涯一言も非難めいたことはいわなかったが、激しい怒りがこの時の太宰の内部で吐け口を失つて渦巻いていたであろうことも想像に難くない。昭和五年十一月十九日受付の分家届出済み戸籍謄本を手にした時の太宰の心は、おそらく煮えくり返る思いであつたのではあるまいか。(+)

物心付いた時から、津島家の寵兒として育てられ、太宰自身、生涯にわたつて、津島家の正統の後継者であることを疑つたことはなかったはずである。その誇り高い男、太宰がどんなに鎮められぬ怒りを胸に身もだえしたか、想像に難くない。ましてや、太宰のして来たことは、長兄の地位を脅かすまいという心づくしから出たことだつたのだ。

太宰から見れば、首つり人の足を引くような、長兄の仕打ちは、死屍に鞭打つ。……窮鳥を厭殺する行為に思えただろう。

ほぼこの処分の十日後、太宰は田部あつみと心中を決行した。あつみは絶命し、太宰は生き残った。

この事件の結果、長兄は弟である太宰の不始末の責任を取り、青森県の県議会議員の職を辞している。ある意味で、長兄の辞職は太宰の思惑通りだったかも知れないが、田部あつみの死は、太宰にとって予期せぬ出来事だったに違いない。

『太宰治研究 その回想』の年譜には、(昭和四年)十一月頃、町の娘と郊外原っぱで、カルモチン心中を図って未遂に終わったといふ。……十二月十日、和服でぶらりと竹内俊吉を訪れ、「地主一代」の連載第一回分の原稿を、「読んでみてください」と言って渡した。その十日深夜、多量のカルモチンを下宿で嚥下して昏睡状態に陥った。(註)とある。

ある意味で習作の断片の寄せ集めとも見られる『葉』に、また兄は、自殺をいい気なものとして嫌った。けれども私は、自殺を處世術みたいな打算的なものとして考えてゐた矢先であつたから、兄のこの言葉を意外に感じた。(註)と太宰は書いている。この引用部は、『彼等と其のいとしき母』から取られている(註)。そこには、中産階級という言葉が出て来るので、夢川利一というペンネームで小説を書いていた太宰の一番下の兄と太宰が、芥川龍之介の自殺について語り合っている場面を連想させる。初出の方では、いい気なものが、感傷的なものになっている。つまり、太宰は三兄との会話をほとんどそのまま長兄との会話にシフトさせたのであろう。

いずれにせよ、この引用からは、太宰が芥川の自殺を計算ずくのものとして解していたことと、自殺(未遂)は一種の処世術であると思っていたことが分かる。

鎌倉の小動崎の海岸における太宰と田部あつみの心中事件を綿密に調査した長篠康一郎氏によると、二人の嚥下したカルモチンの量は三十グラム以下だったといふ。(註)

三十グラムのカルモチンを二人で分けたとすると、一人当たり十五グラムであり、カルモチンの致死量五十グラムの三分の一以下ということになる。つまり、この心中の果たされる可能性は、極めて低かったのである。

『厩氣樓』の同人で、中学時代の太宰の親友でもある中村貞次郎の文章の中に、「厩氣樓同人諸価値表」の太宰の所の書き抜きがあり、そこには 趣味―薬 と書かれている。^(四)

鎌倉における心中未遂以前に二度図られたカルモチンによる自殺未遂のことなども考慮すると、太宰がカルモチンの致死量を知らなかったとは考えにくい。

これらすべてを総合すると、鎌倉の心中事件は、狂言だったということになる。

では田部あつみは、何故死んだのだろうか。長篠氏の指摘しているように^(五) 時期が初冬のことでもある故、彼女は、急性肺炎にかかったか吐瀉物が咽に詰まって窒息死したのであろう。

ここでもう一度、冒頭の書簡に返ってみよう。最後の言葉は、無意識なし。で締め括られている。つまり、この未遂事件も、すべてを意識的、計画的に行なったということである。しかし、長兄に対するしっぺ返しが、心中相手の女性の死という形で、太宰自身に跳ね返って来た。

太宰は、『東京八景』にこう書いている。

女は死んで、私は生きた。死んだひとの事に就いては、以前に何度も書いた。私の生涯の、黒点である。^(六)

『東京八景』は、半生記風のスタイルで書かれたフィクションであるが、この部分には、太宰の真の肉声が籠っている。

もし、この心中未遂事件が、本当に決死の覚悟で遂行されたのなら、太宰も死んでいたことであろう。しかし、

そうでなかったからこそ、太宰は、死んだ女性の影を生涯重く引きずることになったのだらう。

堤重久氏は、この事件について、氏の著作の中で、こう書いている。

……それではなぜ、太宰はその実態を秘かくそつとしたのか。それは女を死にいたらしめた思い出が、あまりにも深く太宰の心魂を損傷したためであり、同時にその件が、太宰の胸奥の琴線に、痛く悲しく触れる何物かを蔵していたからである。（後略）⁽⁴⁾

氏の読み方には、同感する。多分、死ぬはずなどないと信じていた田部あつみの死が、太宰にとって余りにも大きな衝撃だったため、その記憶が聖痕^{トラウマ}となって、抑圧されたのだらう。もしかして、太宰は、カルモチンを呑みながら昏睡状態に陥るまでの記憶を完全に喪失してしまったのかも知れない。そして、抑圧された記憶こそが、無意識の世界において、絶大な力を振るう。つまり、太宰は、腰越で未遂に終わった心中を、玉川上水でやり直さなければならなかったに違いない。

*

*

*

太宰が処女作と呼んでいる『思ひ出』は、一般に自伝小説と解釈されてきた。しかし、この小説を太宰の自伝として読むのはかなり問題であらう。

まずは、この小説について太宰が語っている箇所を書き抜いてみよう。

（前略）遺書を綴った。「思ひ出」百枚である。今では、この「思ひ出」が私の処女作といふ事になつてゐる。自分の幼時からの悪を、飾らずに書いて置きたいと思つたのである。（中略）小さい遺書のもりで、こんな穢い子供もましたといふ幼年及び少年時代の私の告白を、書き綴つたのであるが、その遺書が、逆に猛烈に氣がかり

になつて、私の虚無に幽かな燭燈^{ともし}がともつた。(三)

「思ひ出」は、昭和七年に書いた。二十四歳である。自分を、「いい子」にしないやつに氣をつけて書いた。(四)

芥川龍之介の作品に、『大導寺信輔の半生』という自伝的小説があるが、芥川はそこで、意識的に自分の幼少年期のネガティブな側面をかなり強調して書いている。芥川の熱烈な愛読者だった太宰は、芥川のその作品に影響を受けて、『思ひ出』を書いたのであろう。

太宰は、『僕の幼時』という小学生の頃の作文で、手もあてられない程のワンパク者^(五)であつたことや、家族に本を読んで聞かせて、ほめられたことなどを書いている。この作文からは、太宰の幸福な幼時が見えて来る。太宰は、兄弟中一番の秀才として、ほめられ、家族の期待を背に感じながら、すすくと育つて行つたに違いない。誰の人生にも陰と陽はあるが、太宰は、『思ひ出』に自分の陰の部分だけを書いたと思われる。陽の部分を削ぎ落とすことによつて、『思ひ出』という作品は、柔らかな哀調を帯びた秀作になつたのであろう。

『葉』のエピグラムであり、芦野公園の文学碑にもなっているヴェルレーヌの詩は、どう解釈されるべきだろうか。

撰ばれてあることの

恍惚と不安と

二つわれにあり

ヴェルレーヌ ^(六)

太宰が、世界中に読者を持つ現在、この文学碑を読む者の多くは、ヴェルレーヌに重ねて文学者として選ばれた

作家太宰治の心情を読み取るに違いない。

しかし、習作の断片の寄せ集めとも見られる『葉』を書いた時点で、太宰はどれだけ文学者としての自覚を持っていたであろうか。この時点においてはまだ、太宰に自分の天才への確信がなかったはずである。太宰の苦悩の原点でもあったこと、すなわち、青森県有数の大地主津島家に生まれ、その上兄弟切つての秀才であったことがまさに 撰ばれてあること の実質ではなかったのだろうか。

太宰は『思ひ出』の中で意識的に 恍惚 の部分を語らなかったのだ。

三、『新ハムレット』『右大臣実朝』『庭』

長篠康一郎氏は、『太宰治と腰越心中』にこう書いている。

「僕は、なぜ小説を書くのだらう。——仮に一言こたへて置かう。復讐。」（道化の花）

太宰は、創作の根源的発想が、「復讐」にあると、はつきり私たちに明示している。

かれにとつて「復讐」とは何か。太宰の周辺に存在する「裏切り者」の背信行為は、長兄による義絶（津島家追放）の宣告となつて表面化し、これに伴つ腰越事件は、家郷の人々からも見離されるといふ生涯ぬぐいきれない悲惨な結末をもたらした。

「復讐」とは、勿論「裏切り者」に対する激しい憎悪と、報復の固い決意の表明にほかならない。（中略）

だが太宰は「人間失格」のほか、復讐の 対象 について書いていない。

では、太宰がその文学に形象化し、密かに意図した復讐は遂げられたであろうか。私はそれを具体的に書かなかつたことによって、書くこと以上に立派に果たされていると考えたい。(一)

長篠氏は、太宰が復讐しようとした相手を敢えて名指していないが、文脈から読み取るなら、太宰を義絶した長兄が筆頭にあげられるだろう。太宰の文学すべてを復讐という言葉で括るのは不可能であろうが、太宰の文学にとって、復讐は一つの重要な側面と言えるかも知れない。

太宰の長兄は、こつ語っている。

いくら何でも『右大臣実朝』には家のことや私のことが出てこないだろうと思って読んだのですが、やっぱり出てきたので閉口した記憶があります。私は彼のものを読んで家のことに触れている箇所になると、「あつ、またここで修治のヤツに一発やられている」などと思ったものです。(二)

恐らく、長兄が『太宰治全集』を通読すれば、一発やられている位では済まないだろう。前掲書で、長兄は、読んだのは『津軽』と、『右大臣実朝』くらいです。と語っているが、青春期に劇作家を志したと言われる程演劇好きの長兄のことだから、多分『新ハムレット』も読んでいたであろう。

まず、『新ハムレット』に関する感想 という註の付してある昭和十六年八月一日付井伏鱒二宛書簡から抜き書きしてみよう。

私の過去の生活感情を、すっかり整理して書き残して置きたい気持ちがありました。その意味では、私小説かも知れませんが、それから、形式は戯曲に似てゐますけれど、芝居ではなく、新しい型の小説のつもりで書きました。(三)

作家とは、一般に自分の創作の秘密を人に語りたがらないものだが、太宰は井伏に包み隠さず書いている。冒頭

の手紙同様、太宰の井伏に対する揺らぎない信頼を感じさせる文面である。

ここで読み手の注目を惹くのは、その意味では、私小説かも知れませんが、という箇所であろう。古典を換骨奪胎して、私小説に仕上げるという技法は、太宰の生きていた時代の日本において、新しい創作法だったかも知れない。しかし、この技法においても、太宰が最先鋒ではなかった。芥川龍之介の作品に『戯作三昧』という小説があるが、芥川について伝記的なことを多少でも知っている者が読めば、主人公の馬琴が、芥川自身であり、この作品の中に描かれている生活感覚が、芥川のそれであることに気付くはずである。

恐らく太宰は、芥川から、古典を素材にして私小説を書き、私小説仕立てのフィクションを創作する手法を学んでいたであろう。

『新ハムレット』のはしがきから、井伏宛書簡と関連する部分を書き抜いてみよう。

これは、やはり作者の勝手な、創造の遊戯に過ぎないのである。人物の名前と、だいたいの環境だけを、沙翁の「ハムレット」から拝借して、一つの不幸な家庭を書いた。(中略)

過去の或る時代に於ける、一群の青年の典型を書いた、とは言へるかも知れない。その、始末に困る青年をめくつて、一家庭の、(厳密に言へば、一家庭の、) たつた三日間の出来事を書いたのである。(同)

この小説を私小説と取るなら、家庭とは、津島家ということになる。当然、ハムレットは太宰、クロードヤスは長兄と見なすべきであろう。

ハムレットは、デンマーク王国の正統な後継者である。つまり、太宰は、この作品を書いた、昭和十六年の時点においてもなお、自分が津島家の正統な後継者であると確信していたことが分かり、興味深い。

太宰と長兄との関係が暗示されている箇所を書き出してみよう。

(クローチヤスの台詞) 君は可愛い甥でした。わしは君を、利巧な甥としてしんから愛して來ました。君だつて、先王がおいでの際は、この山羊のをちさんに、なつてゐました。わしの顔が山羊に似てゐるのを、一ばんさきに見つけたのは、わしの可愛い甥でした。叔父さんも、よろこんで山羊のをちさんになつてゐました。あの頃が、なつかしいね。いまでは、わしと君は、親子です。さうして心は、千里も萬里も離れました。むかしの二人の愛情が、そのまま憎惡に變つてしまつた。わしたちが親子になつたのが、不仕合せのもとでした。(四)

この台詞からは、父が急逝し、長兄が家督を相続する前後の太宰と長兄の心境の変化が的確に述べられていると思つ。

(ハムレットの台詞) もとをただせば、山羊のをじさんさ。お酒を飲んで酔つぱらつて、しよつちゆつお父さんに叱られてばかりゐたぢやないか。僕をそのかして、お城の外の女のところへ遊びに連れていつたのも、あの山羊のをちさんぢやないか。(中略) がらでないんだ。可哀さうなくらゐだ。資格がないのさ。王さまの資格がないんだ。(中略) お父さんがなくなつてからは、僕の生活も滅茶滅茶だ。お母さんは僕よりも、山羊のをちさんのほつに味方して、すっかり他人になつてしまつたし、僕は狂つてしまつたんだ。僕は誇りの高い男だ。僕は自分の、このごろの恥知らずの行爲を思へば、たまらない。(以下略) (五)

太宰は、『思ひ出』に、太宰の父の死の印象をかなりばかりかして書いているが、父の早過ぎる死は、太宰の運命を大きく変える大事件だつたのではなかつたか。

引用文の前半の部分は、太宰が大高勝次郎に語つたと言われる、次の言葉を思い起こさせる。

「兄の文治は全く殿様だよ。この間も嫂の身うちの者が女学校で落第したといふので、文治はひどく怒つて、嫂に対して、お前が行届かないから、俺まで恥を掻く。早速実家に帰つて、今後落第などせぬように言いつけて来い」と責めるのだ。嫂は泣いてあやまつた。なかに、兄だつて、人の落第を責める資格は無いのにねえ……」(三)

太宰からすれば、学力不足で旧制の高等学校に進学出来なかつた長兄には、身うちの者の落第についてとやかく言つゝ資格は無い。ように思へただろう。また、同時に、代々俊才を養子に迎えることで大きくなつて来た津島家の歴史を思つと、長兄は力不足のうちに、太宰は、思つていたのである。

長兄が太宰に茶屋酒の味を教えたとしても、同性の兄弟のことなので、別段不思議はない。しかし、ここで一番問題になるのは、太宰を津島家の後継者と見なしていた母の心変わりだろう。

『苦惱の年鑑』にはこう書かれている。

しかし、その家系には、複雑な暗いところは一つも無かつた。財産争ひなどといふ事は無かつた。要するに誰も、醜態を演じなかつた。津軽地方で最も上品な家の一つに数へられてゐたようである。この家系で、人からうしろ指を差されるやうな愚行を演じたのは私ひとりであつた。(四)

しかし、もし太宰が後継者争ひに名のりを上げていたとすると、津島家を二つに分けて、骨肉相食む争ひが起つたことである。

太宰は、『東京八景』にこう書いている。

はかな、滅亡の民の一人として、死んで行かうと、覺悟をきめてゐた。時潮が私に振り當てた役割を、忠實に演じてやらうと思つた。必ず人に負けてやる、という卑屈な役割を。(五)

時潮 といふ言葉に注目すれば、大地主の子と労働者という対立が見えて来る。しかし、果たしてそうだろうか。ここでもう一度、『角力』という小説を思い出していただきたい。太宰は、家の中の長兄との関係を、ここで地主と労働者の対立に摩替えている。太宰が、負けてやる 相手は、長兄だけであろう。

また少し後の所に、太宰はこう書いている。

私は共犯者を作りたくなかつたのである。私ひとり、完全に野良息子にして置きたかつた。すると、周囲の人の立場も、はつきりしていて、いささかも私の巻添へ食ふやうな事が無いだろうと信じた。 (四)

太宰ほどの俊才で向学心の強い人なら、大学など簡単に卒業できそうなものである。彼にとつては、衣錦還郷も容易なことであつただろう。しかし、太宰は何故それをしなかつたのだろうか。

金木の淀君と呼ばれていた祖母はその時まで健在で、太宰に大きな期待をかけていた。太宰が大学を卒業して家に戻れば、太宰と長兄は、津島家の主導権をめぐつて争つことになつたであらう。場合によっては、太宰が長兄を追い出すことになつたかも知れない。長兄は、すでに妻子ある身だつた。太宰自身も文学で身を立てる希望を持っていた。それで、太宰は、負け犬・野良息子の役を演じることになつたのだろう。それが、学力は開校以来といわれ、神童とまで称された (五) 津島修治にとつて、苦痛でなかつたとは言えまい。しかし、太宰は生涯、長兄に対して不良の弟で通した。そして、当然のことながら、太宰の文学作品の中では、太宰と長兄の優劣関係が、実生活上のそれと正反対であつた。

『新ハムレット』の末尾に近い所に、太宰の自殺未遂の意味を解くヒントが隠されている。

(クローチヤスの台詞) あ!ハムレット、氣が狂つたか。短剣を引き抜き、振りかざすと見るより早く、自分

自身の左の頬を切り裂いた。それ、血が流れて汚い。それは一體、なんの芝居だ。わしを切るのかと思つたら、く
るりと切先をかへて自分自身の頬に傷をつけ居つた。自殺の稽古か、新型の恐喝か。(四)

太宰にとつて、自殺未遂や心中未遂は、ある場合は、報復の手段であり、ある場合は、自分の要求を通すための
方便であつた。それは、長兄から見れば、新型の恐喝、のよつなものであつたかも知れない。いずれにしても、太
宰の自殺未遂は、計算されたものと見なしてよいだらう。

『新ハムレット』について、正宗曰鳥は、クロージャスに作者が同情している。(五)と書いているらしいが、多
くの読者は、この小説を読んで、ハムレットが正気でクロージャスが悪人なのか、ハムレットが狂人でクロージャ
スが善意の人なのか、俄に判断できないであらう。

はしがきにある 始末に困る青年 とは、当然、太宰の分身であるハムレットであるから、正宗の発言は、間違
つていないと思える。

この作品のほぼ一年前に『走れメロス』が書かれている。『走れメロス』は和解の物語である。作品を作者に引
き付け過ぎるのは問題かも知れないが、太宰の語っているように、『新ハムレット』が 小説 であるなら、『走
れメロス』のメロスを太宰の分身と見なし、メロスと対決するディオニス王を長兄の分身とすることも出来る。つ
まり、太宰が『走れメロス』を書いていた時、太宰の内に、長兄との和解を希求する強い思いがあつたということ
である。そして、その思いは、『新ハムレット』にも反映されていて、太宰は、クロージャスを悪人として書き切
れなかつたのであらう。

*

*

*

先にも書き抜いたが、太宰の長兄はこう語っている。

いくら何でも『右大臣実朝』には家のことや私のことが出てこないだろうと思って読んだのですが、やっぱり出てきたので閉口した記憶があります。(同)

長兄の発言から推測すると、『右大臣実朝』も『新ハムレット』と同様、ある意味で 私人小説 として読めることになる。その見方でこの作品を読むと、当然、実朝が太宰の分身で、相州北條義時が長兄の分身と見られる。この小説の中で、北條義時は悪役であるが、特に長兄が憤慨したと思われる箇所を書き抜いてみよう。

よく人は、源家は暗いと申してゐるやうでございますが、それは源家のお方たちの暗さではなく、この相模守義時さまおひとりの暗さが、四方にひろがつてゐる故ではなからうかとさへ私たちには思はれました。父君の時政公でさへ、この相州さまに較べると、まだしもお無邪氣な放膽の明るさがあつたやうでございます。それほどの陰氣なにほひが、いつたい、相州さまのどこから發してゐるのか、きつと人間として一ばん大事な何かの徳に缺けてゐたのに違ひございませぬ。その生れつき不具のお心があの承久の亂などで、はしなくも暴露してしまつたのでございませうが、(中略)當時はただ、あのお方を、なんとなく毛嫌ひして、けむつたがつてゐたといふのが鎌倉の大半の人の心情でございました。なんでもない事でも、あのお方がなされると、なんととも言へず、いやしげに見えるのでございますから、それはむしろ、あのお方にとつても不仕合せなところかも知れませぬ。以前はそれほどでもなかつたのでございますが、將軍家が立派に御成人なされ、政務の御決裁もおひとりで見事にお出来になるやうになつてから、目立つて下品に陰氣くさくなりました。(同)

源家は暗い と言つて、北條義時を登場させるのは、歴史的見地からすると、無理がある。北條氏は、血筋と

いう点で、平氏の流れである。ここには、太宰の作為が見て取れる。当然のことながら、源家は、津島家の屋号「源」を連想させる。つまり、この引用文は、津島家が暗いのは、偏に長兄の存在によると読めるのである。この引用箇所を読んだ時、太宰の長兄は、怒髪大を衝く思いをしたに相違ない。

もつ二箇所、北條義時について述べた部分を書き抜いて見よつ。

厩戸の皇子さまもやはり御幼少の頃から御政務の御手助けをなされて居られた御様子で、まあそれ故にこそ故右大臣さまも、いつそつ皇子さまをお慕ひなされたのでございませうが、共に崇沸の念篤く、また皇子さまのお傍には蘇我馬子といふけしからぬ大臣が居られたやうに、故右大臣さまには、相州さまといふ暗いお方が控へて居りまして、馬子といひ、またあの承久年間の相州さまといひ、まことに日本國はじまつて以來の二のみ三無き大惡事を行ひ、(以下略) (平)

これらの引用文は、『新ハムレット』で、太宰がクローチヤスを書いた時と、明らかにトーンが異なっている。この間に何があつたのだろうか。年譜から推測して見よう。

昭和十七年の末、太宰は、母の死去の折に、津軽へ帰郷している。その時、太宰は長兄に会い、長兄との和解がとうてい不可能であると思ひ知らされたに違いない。それと同時に、太宰は、古傷から血が噴き出すような思いをしたのではないだろうか。

長兄は、先に引用した文章の別な箇所でもこう語っている。

以来、まだ色々な事件が修治に付随しており、その都度、沢山の方々に大きな迷惑をかけてまいりましたが、私はいつしか、修治は結局、豊の上では往生しない、と思ひ込むようになりました。とにかく異常な男でしたから、

尋常な死に方をするとは思えなかったのです。^(四)

言葉の端々から、長兄の太宰に対する怒りが感じられる文章である。

いまだに、太宰治異常者説というのが、定説のように罷り通っているようだが、冒頭の手紙で、太宰が 無意識なし。と強く言い切っているから分かるように、太宰は、異常な男 でなぞなかった。太宰は、誰にもそれが芝居と気付かれぬよう異常者という役を演じて来たのだ。そして、恐らく誰にも気付かれぬようその自分に割り振られた役を演じ切ったところに太宰の人間としての器の大きさが感じられる。

太宰は、『人間失格』の末尾に近い所にこう書いている。

父の死んだ事を知ってから、自分はいよいよ腑抜けたやうになりました。父が、もうぬない、自分の胸中から一刻も離れなかつたあの懐かしくおそろしい存在が、もうぬない、自分の苦悩の壺がからつぽになつたやうな氣がしました。自分の苦悩の壺がやけに重かつたのも、あの父のせめだつたのではなからうかとさえ思はれました。まるで張合ひが抜けました。苦悩する能力さへ失ひました。^(五)

太宰の父は、太宰が十三歳の時に亡くなっている。それを念頭に置いて考えると、父の死の父は、家のシンボルであり、父の死は、大地主としての津島家の没落と取れる。長兄は、正面から家を支え、戦った。太宰は、長兄とは反対に、津島家の安泰を願って、家から遠い異郷に身を置いた。家や兄弟姉妹を深く愛していた太宰にとって、家の要である祖母の死と農地改革による家の没落は、どれ程大きな衝撃だっただろう。太宰の様々な愚行の根源にあるのは家、より具体的に言えば、家族への愛情である。それが、太宰の死後においても、長兄に理解されなかったのは、悲しいことである。

北条義時が、実朝を大声で怒鳴った後のことを、太宰は次のように書いている。

生れてこのかた御父母君にさへ、大聲で叱られるなどといふことの無かつたお若い將軍家にとつては、なかなか忘れられぬ思ひもありではなからうかと、(中略)胸苦しく拜察申し上げたことでございました。^(註)

ここからは、長兄が太宰を義絶した時のことが思い浮かぶ。それと同時に、太宰がいかに育ちが良かったか思い知らずにはいられない。多分、太宰には、父母からきつく叱られるようなことが無かつたのだらう。だからこそ、長兄の義絶の処分は、終生忘れ難いことだったのであろう。

『人間失格』の大庭葉蔵は、負のドンファンであり、かなりデフォルメされた太宰像と言えるだらう。それに対して、『右大臣実朝』に描かれた実朝は、ある意味で美化された太宰像かも知れない。太宰には、弟子や年下の友人が多かつた。それらの人々の目に、太宰は、実に美しい人と映つたに違いない。彼らにとって、太宰は、大庭葉蔵よりも実朝に近かつたはずである。

『津軽』のクライマックスである越野たけとの再会の箇所に、太宰はこう書いている。

(前略)次から次へと矢繼早に質問を發する。私はたけの、そのように強くて不遠慮な愛情のあらはし方に接して、ああ、私は、たけに似てゐるのだと思つた。きやうだいの中で、私ひとり、粗野で、がらつぱちのところがあるのは、この悲しい育ての親の影響だつたといふ事に氣附いた。私は、この時はじめて私の育ちの本質をはつきり知らされた。私は斷じて、上品な育ちの男ではない。だうりで、金持ちの子供らしくないところがあつた。^(註)

ここに書かれていることは、全く根も葉もないことではないだらう。しかし、ここには、太宰の一人倍生まれ育ちのよかつたことに対するはにかみが感じられる。太宰は、生まれや育ちの良さを文章にすると、人の鼻に付く

を知っていたら、この紀行文体の小説にこのような落ちを付けたのであつた。

★

★

★

『庭』は、太宰が津軽の実家に疎開していた時のことを、長兄と太宰の秀吉と千利休についての対話を軸として書かれた私小説風の作品である。

しかし、これを純粹な私小説と読むことは不可能であつた。

太宰の長兄は、次のように語っている。

疎開中の太宰と私ですか？彼の部屋とは離れていましたし、メシのときぐらいしか顔を合わせませんでした。もちろん、私は太宰の部屋に入ったことはありません。かといって、喧嘩をしたわけではありません……

(47)

この文章からすると、長兄は太宰とほとんど口をきかなかつたことになる。長兄が、太宰を教へ諭すように、利休の話をしたとは、どうしても思えない。

より具体的に、小説と事実の異なる点を書き出してみよう。

兄は、私をひどく不勉強の、ちつとも本を読まない男だと思つてゐるらしく、さうして、それが兄にとつて何よりも不満な點のやうであつた。

(48)

それと、もつひとつ。若い頃はめつたに人前で本を読まなかつた修治が、食事の前などに、一心不乱に、それこそすごい勢いで読書をしておりました。必ず読んでおりました。私たちが本を読むときの、そう、三倍ぐらいの早さじゃないでしょうか。

(49)

私は利休は、ごめんだ。兄の居候になつてゐながら、兄を一本まゐらせようなんて事はしたくない。張り合ふ

なんて、恥づべき事だ。居候でなくつたつて、私はいままで兄と競争しようと思った事はいちども無い。勝負はもう、生れた時からついてゐるのだ。 (関)

私は彼のものを読んで家のことに触れている個所にくると「あつ、またここで修治のヤツに一発やられている」などと思ったものです。 (関)

長兄の発言の内容と小説『庭』に書かれていることが、二つまで食い違っていると、長兄の発言中にはなくとも、長兄が『庭』を読んでいたのではないかと勘繰りたくなる。

少くとも、以上の引用箇所から、この『庭』という小説が、私小説仕立てのフィクションであることは、明白である。これも、芥川龍之介の好んだ手法である。

この作品の製作の意図は、やはり 兄を一本まゐらせ ることだったに違いない。この小説で最も注目すべき箇所は、兄の次の台詞である。

「太閤と利休の關係は、そんなものぢやないよ。利休は、ほとんど諸侯をしのぐ實力を持つてゐたし、また當時のまあインテリ大名とでもいふべきものは、無學の大閤より風雅の利休を慕つてゐたのだ。だから太閤も、やきもきせざるを得なかつたのだ。」 (中)

つまり、秀吉が政治家である長兄を、風雅の利休が芸術家である太宰を比喩的に表わしているといふことである。兄の台詞からすると、(長兄がこんなことを言つたとは思えないが) 利休の方が秀吉より人間として一枚上手といふことになる。

だからこそ、私は利休は、ごめんだ。兄の居候になつてゐながら、兄を一本まゐらせようなんて事はしたくな

い。という主人公の内的独白が、逆説的な効果を發揮するのである。まさに、この短編でも、大宰は長兄を一本まいらせているのである。

四、感情転移の文学ともよめる『如是我聞』

まずここで、感情転移という用語の定義を明示して置こう。

感情転移 ある人から他のある人へ感情を置きかえることをいう。父親への愛憎を医師や教師に置きかえることがこれにあたる。感情転移は、この意味では、現在の状況のなかで過去に生きること、一種の過去の再現ともいうことができる。^(至)

『如是我聞』については、長部日出雄氏の力作『桜桃とキリスト』の第十六章の前半に詳しい論考^(至)があるので、それを参照して欲しい。

この論考では、『如是我聞四』の太宰が志賀直哉について論じた部分だけを取り上げることにする。この部分は、一読して、著者が過度に感情的になっているような印象を与える。

ここには、不思議なことに、ひさしを借りて、母屋を乗っ取るという表現が、四回繰り返し出てくる。それを書き抜いてみよう。

文壇の片隅にゐて、一部の物好きのひとから愛されるくらいが關の山であるのに、いつの間にか、ひさしを借りて、圖々しく母屋に乗り込み、何やら巨匠のやうな構へをつくつて來たのだから失笑せざるを得ない。^(至)

所詮は ひさしを借りて母屋にあぐらをかいた狐である。何も無い。(六)

風邪をひいたり、中耳炎を起こしたり、それが暗夜が。實に不可解であつた。まるでこれは、れいの綴方教室少年文學では無からうか。それがいつのまにやら、ひさしを借りて、母屋に、無學のくせにてもせず、でんとをさまつてけろりとしてゐる。(六)

頭の悪く、感受性の鈍く、ただ、おれが、おれが、で明け暮れして、さうして一番になりたいだけで、(しかもそれは、ひさしを借りて母屋をとる式の卑劣な方法でもつて)どだい、目的のためには手段を問はないのは、彼ら腕力家の特徴ではあるが、(後略)(六)

『現代小説を語る』という座談会で、太宰はこつ語っている。

なにも志賀直哉の、あんなものが正統であつてオーソドックスだといふ……そんなことを僕は感じたくない。寧ろあの人は邪道だと思つてゐる。文學から……(七)

この言葉との関連で読めば、ひさしを借りて、母屋を乗つ取るという表現が、志賀直哉の正統性に対する批判と取れる。しかし、太宰が、それを四度も繰り返ししているとすると、何か異常なものを感じる。

恐らく、太宰は、志賀直哉の背後に長兄の影を見ていたのであろう。『新ハムレット』の冒頭の部分に、王子ハムレットは若冠ゆゑ、皆のすすめに依つて、わしが王位にのぼつたのです。(八) というクローチヤスの台詞がある。実際津島家でも、長兄は、太宰が大学を卒業するまでの中継役として、家督を相続したのかも知れない。その長兄が、太宰を義絶したのだから、それは、まさにひさしを借りて母屋を乗つ取る行為のように、太宰の目に映つたとだろつ。

ひさしを借りて、母屋を乗つ取る以外にも、太宰の長兄を連想させる表現があるので、書き出して見よう。

まるでこれは、れの綴方教室、少年文學では無からうか

(六)

頑固とかいふ親爺が、ひとりあると、その家族たちは、みな不幸の溜息をもらしてゐるものだ。

(七)

だから、生命がげでものを書く作家の惡口を言ひ、それこそ、首くくりの足を引くやつなことをやらす。

(八)

君について、うんざりしてゐることは、もう一つある。それは、芥川の苦惱がまるで解つてゐないことである。

(九)

君は、代議士にでも出ればよかつた。その厚顔、自己肯定、代議士などにつてつけである。

(一〇)

おまへの弟に對して、おまへがどんな態度をとつたか、よかれあしかれ、てんで書けないぢやないか。

(一一)

順不同に並べてみたが、これらの文章を精読していると、太宰の予先が、対決している相手である志賀直哉から微妙にずれてしまつてゐるよつに感じられる。その予先は、志賀の背後にある長兄の影に向けられてゐるよつである。

太宰は、『ろまん燈籠』に、長兄は、(中略)遠慮なく申せば、物語は、下手くそである。何を書いて、すぐ論文のやつになつてしまふ。(一三)と書いてゐる。太宰の長兄は、戯曲の愛好家で、若い頃には小説も書いてゐるが、

太宰の目から見れば、それは、綴り方教室や少年文學の或を出るものではなかつたのだらう。

第三章に引用した大高勝次郎の文章を読み返していただければ分かるが、太宰の長兄は、まだ若い頃からワンマンで、そのため、家族が苦勞したであらうことは、想像に難くない。

首くくりの足を引くやつなことをやらす。という文は、志賀をきくりとさせたかも知れない。なぜなら、

『如是我聞四』は、太宰の心中による死のほほ直後に発表されたからである。しかし、この文章を太宰が口述した時点で、太宰に死ぬ意志はなかつた。むしろ、太宰が、家のことや文學のことで苦惱していた時に、太宰を義絶し

た長兄の行ないこそ、首くくりの足を引くやうなことであつたに違いない。

『春掛にて』を読む限りにおいて、志賀直哉は、かなり正しく芥川を理解していたと言えるかも知れない。彼は芥川に同情していないが、それゆえに、芥川の苦悩も理解していたであらう。一方、太宰の長兄が、芥川の自殺をした時、自殺をいい氣なものと言つたとすれば、彼は、芥川のことを余り理解していなかつたことになる。

君は、代議士にでも出ればよかつた。という箇所は、太宰が衆議院議員に当選していた長兄と志賀直哉を重ね合わせている所であらう。

最後の引用は、太宰のことを結局全く理解しなかつた長兄に、太宰がぶつけたかつた言葉かも知れない。

『如是我聞四』には、それまでとは異なる奇妙な表現が続出して、言葉が空回りしているような印象を受ける。太宰は、志賀直哉という長男的なものの象徴と向いつた時、志賀と長兄を重ね合わせていたに違いない。それは、おそらく無意識のことだつたろうが、意識の表層に近い所で起つた感情転移だつたため、志賀から太宰の長兄への感情転移であることが、分かる。

『如是我聞四』を志賀が読んで、こじつけやいいがかりとしか思えなかつただろうが、太宰の長兄が読めば、多くの言葉が自分に向けられていることに気付いたかも知れない。

『新ハムレット』や『右大臣実朝』や『庭』は、ある意味で、意識され計算し尽くされた長兄への復讐かも知れないが、『如是我聞四』は、無意識的な感情転移であるだけに、不明解な部分が残つてしまふ。しかしその感情の激しい表白という点で、太宰が、長兄に対して抱いていた怒りを直接感じ取ることができる。

文学は生み出されると同時に一人歩きを始める。文学をどう読むかは、ある意味で、読者に任されている。しか

し、文学の成立の契機を探ることに、意味はあるだろう。

注

「作品及び書簡は、筑摩全集類聚「太宰治全集」全十二巻による。

- 一、 書簡一八七 第十一巻二〇六、一〇七
- 二、 「肉親が楽しめなかった弟の小説」 津島文治 「新文芸読本 太宰治」 一五四、一五五
- 三、 「太宰治研究 その回想」 桂英澄編 三三四
- 四、 「新文芸読本 太宰治」 一五五
- 五、 第十一巻 四二五、
- 六、 第十一巻 二二五
- 七、 第十一巻 二二二
- 八、 「太宰治研究 その回想」 三三二
- 九、 第十一巻 一八七
- 十、 第十一巻 二七〇
- 十一、 「太宰治研究 その回想」 一三九
- 十二、 第一巻 八一
- 十三、 「太宰治研究 その回想」 三三九
- 十四、 第一巻 七

- 十五、第十二巻 一九八
- 十六、「太宰治 七里ヶ浜心中」 長篠康一郎 二五～二六
- 十七、「太宰治研究 その回想」 十八
- 十八、「太宰治 七里ヶ浜心中」 二二六
- 十九、第四巻 七八
- 二十、「恋と革命 評伝・太宰治」 堤重久 五一
- 二十一、第四巻 八一～八二
- 二十二、第十巻 三七八
- 二十三、第十一巻 四七〇
- 二十四、第一巻 五 原文は *J'ai l'extase et j'ai la terreur d'être choisi.*
直訳すれば「私には、選ばれていることの恍惚とおのきがある。」
- 二十五、「群像 日本の作家」¹⁷ 太宰治」 一三二～一三三
- 二十六、「新文芸読本 太宰治」 一五四
- 二十七、書簡 三八一 第十一巻 二三二
- 二十八、第四巻 一八六
- 二十九、第四巻 一九七
- 三十、第四巻 二〇二
- 三十一、「津島修治の思い出」 大高勝次郎 「太宰治研究 その回想」 二七～二八
- 三十二、第八巻 二四七
- 三十三、第四巻 八二

- 三十四、第四卷 八四
- 三十五、「恋と革命」 二二
- 三十六、第四卷 三二〇、三二二
- 三十七、第十卷 三八九
- 三十八、「新文芸読本 太宰治」 一五四
- 三十九、第六卷 九一、九二
- 四十、第六卷 一二〇
- 四十一、「新文芸読本 太宰治」 一五七
- 四十二、第九卷 五〇九
- 四十三、第六卷 一一八、一二九
- 四十四、第七卷 一六六
- 四十五、「新文芸読本 太宰治」 一五九
- 四十六、第八卷 一六〇
- 四十七、「新文芸読本 太宰治」 一五九
- 四十八、第八卷 一六一
- 四十九、「新文芸読本 太宰治」 一五四
- 五十、第八卷 一六一
- 五十一、「世界の名著⁴⁹ 用語解説」 一
- 五十二、「桜桃とキリスト」 長部日出雄 四三八、
- 五十三、第十卷 三六四

五十四、	第十卷	三六七
五十五、	第十卷	三六八
五十六、	第十卷	三六九
五十七、	第十卷	五〇一
五十八、	第四卷	一八九
五十九、	第十卷	三六六
六十、	第十卷	三七〇
六十一、	第十卷	三七二
六十二、	第十卷	三七二
六十三、	第十卷	三七一
六十四、	第十卷	三六五
六十五、	第四卷	六六
六十六、	第一卷	七